

江戸時代の「おかげまゐり」と「せぎやう」

(モラロジー研究所教授) 所 功

本年十月初旬に第六十二回の式年遷宮が行われる。伊勢には、江戸時代から参詣者が急増した。すでに寛永十五年(一六三八)「遠近の男女、伊勢宗廟へ詣でる事夥し(近ごろいはゆるおかげ参りなり)」(増補武江年表)とみえる。また宝永二年(一七〇五)には、僅か五十日足らずで三百数十万余人が参宮したことを見聞した外宮祠官度会弘乘編『伊勢大神宮統神異記』に注目すべき記事がある。

参宮人に饗応を為す。山田三方中より、宮川船渡しに宰領を置き、伴にはぐねたる参宮人を吟味し、家々在々より按参に馳走を為し、所々に仮小屋を立て、握飯(米五十俵、又は八十俵の所有り)赤飯・粥・餅、又は銭・茶などを振舞ひ、そのほか御師をはじめ町人・商人・百姓・後家・婦に至るまで、ふびんなる逸参りを分限相応に……宿を貸し、路銭をとらせ、宮中(神宮)へも案内を付け、駕籠かきはかごを出し、馬子は馬を出し、思ひ(心)々の報なり。誠に殊勝なりし事どもなり。

このような伊勢庶民らによる「饗応」は「施行」(布施の行)ともいわれ、伊勢以外の道中でも馬や駕などを「恵施いたし申」したという(同上)。それは以後は六十年ごとの「おかげまゐり」ブームで益々盛んになり、にわかに信じ難いほどの話が伝わっている。

たとえば、明和六年(一七六九)第五十回の式年遷宮から二年後にも、四月から八月までに四百数十万の人々が参詣したという。その一人が山形の寒河江から来た酒屋の安孫子周蔵(30歳)で、『東岡仙(俳号)参宮日記』に、次のごとく書き留めている。

ふしぎなる事は犬の抜け参り。これも数多く御座候。首に銭をゆいつけ、ぬけ参りの札つかはし候へば、宿々にてはその銭を出し、食ひ物に立ち寄り頭振りて物を乞ひ、伊勢まで参り候よし、犬にもいくつも行き合せ申し候。

このような「おかげ犬」を各地で見聞した記録は、明和だけでなく文政・天保・嘉永などにも多くある。とくに度会重全著『明和統後神異記』によれば、明和八年四月十六日、上方(山城国久世郡)から来た小さな白い雄犬が、外宮の北御門から入って正宮の「広前に平伏」したので、宮人(神官)が御祓札を首につけてやると、廻り道して五十鈴川を渡り、内宮の広前でも平伏してから、山田で旅籠に泊めてもらい、もと来た道を帰って行ったという。

これを事実と認めるならば、何故それが可能になったかを考えてみる必要がある。思うに、お伊勢さん(大神宮)の「おかげ」に感謝して参宮する、といえは咎められず、野良仕事や奉公先から何も持たないで抜け出しても、無事に行つて帰ることができた。その「おかげ」を共感する人々が分相応の「施行」(自発的な利他行)に努めた。そんな「思い遣り」が「お持て成し」の自発的行為となり、それが「おかげ犬」にも及んだということであろうか。

ちなみに、明和七年に三十二歳で讓位された後桜町女帝は、上皇として四十二年間、後桃園・光格両天皇を見送られた(今冬二百年祭)。その一つとして、天明七年(一七八七)大飢饉の際、困窮した老若男女が河内や近江などから「施行」を受けて、京都御所へ「千度参り」に来ると、上皇から三万个もの小林檜や赤飯を施され、それに倣って宮家や公家も御茶や握飯を配ったという(『落葉集』)。

〈参考〉大西源一『大神宮史要』(平凡社)、仁科邦男『犬の伊勢参り』(平凡社新書)、藤田覺『幕末の天皇』(講談社選書) など